

## 藍の話

天然の藍は世界中で数世紀にも渡って、染料として尊ばれて来ました。藍は様々な種類の植物繊維から抽出されますが、日本の藍は日本固有の植物である「蓼（たで）」から取られ、殊に深い色合いを出すことで有名です。「蓼」は醗酵させると「すくも」と呼ばれる染め材料になります。その「すくも」に、「ふすま」（麦の外側を米糠のようにしたパウダー）、消石灰と灰の灰汁とを加えて、約7日から10日かけて自然に発酵を待ちます。

布や糸は、大きな甕（かめ）の染料に浸しては乾かす作業を15回から20回（シルクを、染める時には40回から45回）も繰り返すことによって、深い色合いに染め上げられていきます。さらに天日干しをすることによって、鮮やかな藍の色が現れ、染料自体が布や糸の繊維の耐久性も高めるのです。

一日に2回くらい甕に入れ、十分に水洗いをして、3日ほど干してから、又甕に入れます。晴れた日にしか、仕事は出来ませんので、約3ヶ月掛かります。天然発酵本藍染めは使い込むほどに良い色合いになり、着こなすほどに柔らかく肌触りよくなっていく、という性質も持っており、生活に根づいた素晴らしい染色方法ともいえます。

### 日本の藍

日本で一般的に栽培されている藍は、タデ科のタデ藍です。花色は白花種と赤花種があります。このほかに沖縄にはキツネノマゴ科の琉球藍があり、古くから泥藍として使われています。また北海道には古来アイヌが利用していた蝦夷大青が海岸地方に自生していましたが、最近是非常に少なくなってしまったようです。

### インドの藍

古代から十九世紀までインドは藍の主産地でした。インド藍はコマツナギ属のマメ科の藍で、日本で栽培されているタデ藍が一年草なのに対し、これらは多年生の低木です。別名木藍ともいいます。インドでは現在はほとんどこれらの

木藍は栽培されておらず、藍染はすべて合成染料です。

## 中国の藍

中国に産する藍の種類については、蓼藍（単に藍）・菘藍（大青）・琉球藍（山藍）・木藍（インド藍）の四種と考えられています。

## 実利的作用

繊維が締まり丈夫になる  
防虫・消臭効果、消炎、血止め  
皮膚病の抑制など  
紫外線をカットする効果

## 青色の心理学的作用

精神の沈静化  
集中力の促進  
内分泌系の働きの鎮静  
発汗を抑えるなど

**藍染めの効用** ゆかたに限らず、日本では昔から衣類に藍染めが多用されてきました。日本で主に栽培されてきたのは蓼藍（たदैあい）といい、蓼科の一年草です。「蓼食う虫も好き好き」という言葉がありますが、蓼にはその言葉通り、虫よけの効果があります。

ジャパン・ブルーとは“藍染め”の色を指す言葉でした。明治初期に来日したイギリスの学者アトキンソンが、多くの日本人が藍染め衣装を着ていることに驚き、表した言葉だそうです。桃山時代の末頃から江戸時代にかけて、藍で多様に染められた木綿が広く庶民に普及しました。アトキンソンが来日したのは、日本の藍染め文化が成熟しきった頃だったのでしょう。

と言うといかにも藍染めが日本独自のもののようですが、さにあらず。藍は世界各地で紀元前の昔から親しまれてきた植物染料です。ただしアカネ染めや紅

花染めなどのように「ある決まった植物で染める」ではありません。ヨーロッパでは大青、インドでは印度藍、日本では蓼藍や琉球藍といった具合に、その土地にある“藍の色素”を含んだ植物の葉を利用して染めるのが藍染めです。中でも印度藍が濃い青を生むことから、“インディゴブルー（インドの藍）”は世界中に広がりました。

藍には青い色を染めるだけでなく、染めた生地強度を増し、虫を寄せ付けず、肌荒れや冷え性を防ぎ、抗菌・消臭作用をプラスするなどの効用があるとされます。これらの性質を利用して生まれたのがインディゴブルーで染めたジーンズ。アメリカ西部開拓時代、荒野で活動するにはぴったりの機能性だったのです。日本でも武士が鎧（よろい）の下に藍染めの肌着を身に着けたとか。もちろん浴衣にも最適です。

でも、残念ながらジーンズも浴衣も現在の“青”のほとんどは天然の藍染めではなく化学染料で染められたもの。さまざまな効用はもちろん、藍本来のピュアな色も失われてしまっています。約150年前に化学染料が発明されて以来、それまで何千年もの歴史を誇ってきた植物染めは世界中で急速に衰退してしまったのです。それは植物のもつ薬効よりも、化学的に作り出した医薬品に重きを置くようになったのと同じでした。

それが今、植物の薬効が見直されているのと同様、植物染めも見直されています。染め上げるのに手間がかかる分、えもいわれぬ美しい色、それにプラスアルファの効用も。藍染めの青は、藍の酸化具合によって微妙な味わいが生まれます。そして染め上がった藍は、洗うたびに余計な色を落として美しくなっていくといいます。着物好きな私は浴衣もいくつか持っていますが、うち一枚が絞りの藍染め。紺と白、たった二色の取り合わせがなんと粋で美しいことでしょう。帯や下駄の鼻緒で色を差せば、組み合わせによって何通りもの着こなしが楽しめ、いつまでも飽きることなく着られます。

「藍は生きています」「藍は自然がくれた色なのです」

だから、藍の瓶に化学繊維を入れても色は付着しません。

人工的に作った化学の力は、自然界の力には勝てないのです。

「自然とはすごい！」と思います。

長い間、育まれてきた藍には、他にもすごい力があります。

藍の葉は、ふぐ中毒の解毒に、また解熱剤としての効用があり、煎じて飲む

ば、健康に良いとされています。

また、藍で染めた衣服は虫（蛇なども）を寄せ付けないため、足袋や野良着などの仕事着に使われています。

殺菌効果があるので、あせもやかぶれなどの皮膚病にも良いとされています。まだあります。

昔、武士たちは戦場に行くとき、藍染めの下着を着用していました。

これは、藍染めの下着には、消臭効果と保温効果があったからだと言われています。

藍染めは糸を強くする効果もあったので、昔の火消しの衣、よろい、今でも剣道着に使われています。

飛鳥の時代から、続いてきた「藍染め」、日本独特の技法によって創り出された「藍染め」、改めて

藍の色の奥深さを感じます。

「自然がくれた色」だからこそ、「藍染め」に愛着が湧いてくるのかもしれない。

いつまでも、この技術が廃れることなく、そして「藍染め」のすばらしさを伝えていきたいです。